

令和 7 年度 学校教育自己診断結果について

【生徒】

○ 経年変化の全体的な傾向 (R5→R7)

R7 年度・R6 年度・R5 年度 を比較すると、全体として以下の傾向が読み取れる。

① 学習・授業に関する項目の推移

多くの質問項目において、R5 年度 → R6 年度にかけて一時的な低下または横ばいが見られたものの、R7 年度には回復・上昇傾向が確認できる。

「授業のわかりやすさ」「教え方の工夫」「考えをまとめたり発表する機会」など授業改善に直結する項目では、R7 年度の肯定的回答割合が R6 年度を上回っており、授業改善の取組が一定の成果を上げていると考えられる。

② 教師との関係性・支援に関する項目

「先生は生徒の意見を聞いてくれる」「相談に親身に応じてくれる」などの項目では、R5 年度から R7 年度にかけて緩やかな上昇傾向が見られる。

教師による声かけ、進路・生活面での個別対応、生徒理解を重視した指導体制が、生徒に一定程度評価されていると考えられる。

③ 学校生活・行事に関する項目

文化祭・体育祭・学校生活全般に関する項目では、年度ごとの変動はあるものの、R7 年度は概ね安定した数値を示している。特に R6 年度でやや低下が見られた項目についても、R7 年度には持ち直しており、学校行事や日常の学校生活が生徒にとって肯定的に受け止められている状況がうかがえる。

④ 人権・安心感に関する項目

「人権が尊重されている」「困ったときに真剣に対応してくれる」などの項目では、R5・R6 年度と比較して R7 年度の数値が安定しており、大きな低下は見られない。これは、人権教育、いじめ防止への取組み、安心して学校生活を送れる環境づくりが一定の水準で維持されていることを示している。

○ まとめ

R6 年度に一部低下が見られた項目が、R7 年度には回復・改善している。授業改善や生徒との関係づくりに関する取組みが数値として表れている。大きなマイナス傾向の項目は少なく、全体として安定した評価が得られているという点が明らかとなった。

今後は、R7 年度で数値が伸びた取組みを「強み」として継続・発信すること、依然として伸び悩む項目については、具体的な授業・指導改善につなげることが、学校教育のさらなる充実につながると考えられる。

【保護者】

- 保護者アンケートにおける経年変化の考察(R5～R7)、R5 年度・R6 年度・R7 年度を比較すると、全体として大きな数値の急変は見られず、概ね安定した評価を維持していることが読み取れる。

① 授業・学習に関する項目

「授業がわかりやすく楽しいと子どもが言っている」といった学習面に関する項目では、R5 年度 → R6 年度にかけてはほぼ横ばい。R7 年度においても、同程度の水準を維持しており、保護者から見た授業理解度・学習環境に対する評価は、継続的に一定の水準を保っていると考えられる。

一方で、肯定的回答の割合は突出して上昇しているわけではないことから、今後は「授業の工夫」や「学習の成果が家庭で実感できる取り組み」を、より丁寧に発信していくことが課題である。

② 教員の指導・対応に関する項目

「先生は子どものことを理解し、適切に対応している」「相談に応じてくれる」といった項目では、R5・R6 年度と比べ、R7 年度はやや安定感のある推移で大きな増加は見られないことから、教員の生徒対応や保護者対応について、一定の信頼が維持されていると読み取ることができ、学校全体としての指導体制が継続的に機能していることを示している。

③ 学校生活・安心感に関する項目

「子どもは安心して学校生活を送っている」「学校は安全に配慮している」といった項目については、各年度を通して数値の変動が小さく、R7 年度も概ね R6・R5 年度と同水準となっており、学校生活の安心感・安全面に関しては、保護者から安定した評価を得ていると考えられる。これは、日常の生徒指導や危機管理体制が、一定の水準で維持されている結果といえる。

④ 学校への信頼・満足度に関する項目

学校全体への満足度や信頼に関わる質問項目では、年度間で大きな差は見られず R7 年度も引き続き安定した数値を示していることから、学校運営そのものに対する保護者の評価は、長期的に見て安定していると考えられる。

○ まとめ

経年比較を行った結果、R5 年度から R7 年度にかけて、評価は全体的に安定して推移している。ただ、特定の項目で大きく評価が下がる傾向は見られない一方で、顕著な上昇も少なかった。

今後は、学校の取り組みや成果を、保護者に「見える形」で発信する工夫や、学習面・進路面において、家庭で実感できる成果づくりを進めることで、より高い肯定的評価につなげていくことが求められる。

【教職員】

○ R5 年度、R6 年度、R7 年度を比較すると、教職員による学校評価は全体として安定的に推移している。

① 学校運営・組織的取組に関する項目

「学校の教育活動について教職員間で話し合っている」「組織的に教育活動が進められている」といった項目では、R5 年度から R6 年度にかけて大きな変動はなく、R7 年度も同水準またはやや改善傾向を示す項目が見られることから、学校運営に関する共通理解や協働体制は、継続的に維持されていると考えられる。

一方で、数値が大きく上昇している項目は限定的であり、校内での情報共有や意思決定プロセスについては、引き続き改善の余地がある。

② 教育活動・授業改善に関する項目

授業づくりや教育実践に関する項目では、年度間の変動幅は比較的小さく、R7 年度においても概ね R6・R5 年度と同程度の評価となっている。

このことから、教育活動の質は一定の水準で安定している一方、教職員自身が「大きな改善」を実感するまでには至っていない。

③ 働き方・職場環境に関する項目

「働きやすさ」「業務の効率」「協力体制」に関する項目では、R6 年度でやや数値の変動が見られる項目があるものの、R7 年度には再び安定した傾向を示すものが多いことから、職場環境に対する評価は大きく崩れていない。

ただし、肯定的評価が高止まりしているわけではなく、教職員の負担感や業務量に対する課題意識は、引き続き存在していると考えられる。

④ 学校全体への自己評価

学校全体の取組みや方向性に関する項目では、R5～R7 年度を通じて大きな低下は見られず一定の評価が維持されている。

○ まとめ

比較した結果、教職員による学校評価は、3 年間を通じて概ね安定して推移している。急激な変化は少なく、「現状維持」の傾向が強い一方で、顕著な向上が見られにくい項目も多い。また、課題が固定化しつつある可能性もある。

今後は、校内での対話や協働の質を高める取組みにより、教職員が成果を実感できる授業改善・業務改善の可視化を進めることが、次年度以降の評価向上につながると考えられる。